

ひと

築地市場の「語り部」を務めた米国人

Theodore Bestor

テオドル・ベスター さん (65)



今月から全国公開が始まった映画「TSUKIJI WONDERLAND (築地ワンダーランド)」。作品の中で語り手として登場し、ずっと見つめ続けた築地市場の魅力を発信する。

米ハーバード大学教授でライシャワー日本研究所長が本職だ。海から遠く離れた米イリノイ州生まれ。「肉の国から来ました」

と言うように、子どものころは魚の食事を知らなかった。

1976年、留学生として東京へ。深川で暮らした。築地市場の魅力を知り、89年から始めた研究は2004年、著書「築地」に結実した。何度も来日しては足を運び、食文化から流通や経済システム、市場内独特のルールまで文化人類学者の視点で描いた。

「ちゃめっ気たっぷり」「外国人だから研究できた」と話す。

日本人だったら「めんどくせえ、帰れ!」となるところが「外国人ならしゃあねえな」に。魚の種類から始まって、子どもみたいな質問をしても市場の人々は相手にしてくれた、と振り返る。

映画は1年以上にわたり市場や周辺を追う日本人監督のドキュメンタリー。仲買人や料理人ら150人以上の言葉を紡ぐ。

児童が学校給食でアジの骨をきれいに取って喜ぶ場面が「中でも印象的」だった。「日本食は文化や伝統、マナーを伝える生活の知恵。それが何げない食への感謝だ」とも語る。文・写真 仙波理